

上野城代の上京と病氣療養

市史編さんだより(11)

市史編さん係で調査した史料の中に、「京都に居られた時に来た手紙」と注記された8通の手紙があります。差出人は「采女」となっており、上野城代を勤めた藤堂采女が上京した際に出した手紙と思われる。采女の名前は何代も受け継がれているので、手紙からは何代目の采女かは分かりません。

手紙から采女の動きを追ってみましょう。2月5日夕方に京都に着き、6日に祇園社、清水寺を参詣。19日に大阪に到着し、20日に四天王寺へ参詣。24日から兵庫県の明石や高砂などを見物し、28日に京都に戻っています。29日の手紙では2・3日のうちに嵐山へ出かける予定だと記しています。采女はひと月ほどの間に京都や大阪の有名な寺社や景勝地を回っています。江戸時代には、名所を記した今でいうガイドブックが売られていたので、それを参考に訪問先を決めたのでしょう。

しかし、采女の旅行の目的は観光ではありませんでした。京都では福井丹波守と三角了敬という医者を訪れています。手紙の中でもたびたび病状について伝えており、療養が旅の目的だったのです。

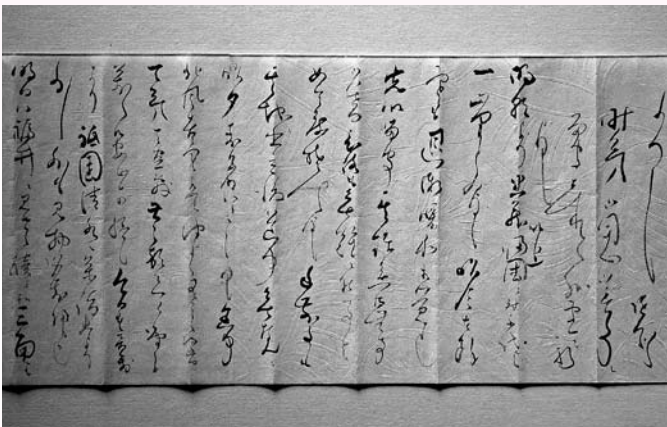
ところで、療養のため上京を許されたのは何代目の采女だったのでしょうか。江戸時代の武士が領地を離れる時は藩の許可が必要でした。藤堂藩の記録『庁事類編』を見ますと、文化11年(1814)1月10日に采女から療

養のため上京の願いが出され、23日に許可されたことが記されています。また、2月3日に上野を出発し、3月12日に帰ってきたことも書かれています。先の手紙で見た采女の動きと合致することから、差出人は7代目の采女、藤堂元孝であったことが分かります。

これらの手紙は元孝が妻に宛てたもので、元孝は病気が快方に向かっていることも繰り返し書いており、上野にいる妻を安心させようとする優しさもかがえます。

『庁事類編』には、家臣が湯治のため有馬へ行くことを許可する記事がしばしば見られ、病氣の際、療養のための休暇が取れたようです。これらの史料からは、武士の意外なくらしの一面も知ることができます。

本庁総務課市史編さん係 ☎52・4380



▲「上京の様子を伝える采女の手紙」
(名張市教育委員会所蔵)

伊賀上野城高石垣の清掃

11月17日～20日にかけて、上野公園美化行事の一環として、市の要請で陸上自衛隊第33普通科連隊による伊賀上野城高石垣の雑木伐採作業が行われました。

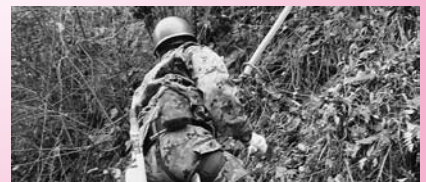
伊賀上野城の高石垣は、津藩主の藤堂高虎が慶長16年(1611)に伊賀上野城を大改築したときに現在の姿に改修したと伝えられています。

お城周辺の東を除く三方に高く積まれた石垣は、総延長約320mにも及び、高さは根石より15間(29.7m)で、お城の石垣では、日本一を競う高さです。それだけに、この高石垣に覆い茂るシダ・フジ・ウルシといった雑木の取り

除きは危険を伴う作業です。

自衛隊の皆さん(表紙写真は伊賀市出身の3曹沢田真介さん)が高所でのロープワークを披露し、悪戦苦闘しながらもカマやナタ、ノコギリなどを使って行いました。

お城を訪れる観光客に内堀からそびえ立つ、生まれ変わった伊賀上野城高石垣の荘厳なたたずまいを見て喜んでいただけることでしょう。



市の花
ササユリ



市の木
アカマツ



市の鳥
キジ